

しゃいました。大きな病院はがんを診ている泌尿器科の先生、骨を診ている整形外科の先生、申し訳ないけどみんなバラバラで違う方向を向いています。だからまとめて東へ向けてくれる、かかりつけ医がいるんです。私たち看護師が、そこをきちんと交通整理していかないとあかんと思うています。

奥さん、息子さんと話をした後、整形の先生からAさんにも、事実を、辛いことだけれど大事なことから説明してもらいました。そしてAさんは、絵を描きたいからこのまま寝たきりでもいい、おしっこも管でいい、便所も移らんでいい、1分1秒でも長く絵を描きたいと言いました。じゃあそのための準備をしてお家へ帰ろうと進めていきました。

大事なことは、「あなたの思い、聞かせてください」。なかなかこねえ、お医者さんやらねえ、そばにいる看護師も怖くて聞けんのですわあ。もう一歩患者さんの思いに近づいてどう思うてはるかなあ、何を大事にしたいんかなあ、思いに寄り添って、これからをどう生きるかを一緒に考える。退院支援は人生の再構築をお手伝いすることだと思っています。

Aさんのお家には大きなアトリエがあり、そこで絵を描きたいと言っ

たので、アトリエにまずベッドを置きました。そしてベッドのまま絵を描くためにベッドは頭が上がるだけのために、業者に相談して90度回るようにしました。他にもトイレのこと、着替え、お風呂のことなどいろいろなことと奥さんに負担がいえます。そのケアの部分と家の環境を整えることは介護保険を使って準備できるわけです。お家のお風呂は深いので、寝たままに入れる訪問入浴のサービスも入れましょう。

こうした形で、2つの視点でお家へ帰るための準備をしていきます。お家に帰ることは、病院の医療者だけでは絶対にできません。在宅のケアマネさんや訪問看護師さんや、診療所の人やヘルパーさんなど、病院と地域が一緒になってお家に帰るための準備をしていくことが、とても大事だと思っています。

3ヶ月間家で療養して、Aさんはご自宅で亡くなることができました。

病院は生活する場所ではありません。ましてや、最期の時を送る、人生の暮らきの場所にはならないと、私は思います。自宅が難しければ、自宅に変わる生活の場に患者さんを返していこう。あなたは誰と何処でこれからの人生を過ごしたいですか。

《シンポジウム》

「逝き方から生き方を学ぶ」

シンポジスト／がん・パッチン・元気隊

大山薫氏

(以下、内容一部抜粋)



私は、40歳で乳がんが見つかり、温存手術と放射線治療、ホルモン療法を受け、今は普通に暮らしています。

2人の選択には、それぞれの強い思いが反映されていました。

私の治療が終わる頃、9歳年上の姉にすい臓がんが見つかり、姉の役に立ちたいと「がん・パッチン・元気隊」のがんサロンを尋ね、以後ケアサポーターとして活動を続けています。これは、がんで亡くなった姉と、母の話です。姉は、53歳で手術不可のすい臓がんと宣

告され、55歳で亡くなりました。その一年後、84歳の母が肺炎で入院しましたが、その時に姉ががんが見つかり、昨年5月に亡くなりました。

姉は治療のため会社を退職。そして親元を離れた娘2人は母親の看護のために自宅に戻り、家族4人の暮らしを再開しました。娘が戻り、姉の看護をしてくれるなら、姉は最期まで家族と暮らせる在宅ケア、母は看護を受けられる病院や施設が最善なのではないかと思っていました。しかし、実際はその逆でした。姉は病院で、母は自宅で亡くなりました。2人の選択には、それぞれの強い思いが反映されていました。患者本人でない私達は、患者が良い治療を受けることや、手厚い看護を受ける

こと、また一日でも長生きすることを患者に望み、期待します。しかし、姉と母は違いました。何が嫌で何を一番大切に過ごしていたか、それぞれの強い思いや希望をはっきりと伝えてくれました。姉は出来る限り抗がん剤の治療を行いたい。妻とし

て、母として、身体が動く限り家族の世話をしたい。また瘦せた体を主人や娘達には見せたくないのとお風呂の介助はしなくて良い。そして家族にトイレの世話をかけたくないの、そうなら緩和病棟に入りたいと希望を話してくれました。

母は肺炎の治療

療はして欲しい。けれどリハビリで入院した病院で延命治療を受ける患者さんを目の当たりにし、自分は絶対に延命治療を受けたくない。そして長い入院生活を送ったので、これからは抗がん剤治療をせずに自宅に戻って暮らしたいと考えていました。

それぞれの思いについて

(姉の思い※ブログより)私には娘が2人います。28歳と25歳です。それぞれ別に住んでいたけれど、私が余命宣告されてから戻ってきてくれて、今は家族4人で一緒に生活しています。で、この娘達、家の事もありません。



さすがに抗がん剤治療中のしんどい時の買い物と炊事はしてくれませんが、それ以外に私に任せきりです。退院してきた時の家の中の散らかりようは半端ないんです。そんなときはハア〜と溜息が出ます。でも、よろよろになつて家事をしながら、ずーっとこうやつていたいと思うんです。いつかは本当に娘達に頼らないといけない日が来ます。それまでは、何もかも私がやってあげたいんです。お母さん、お母さんと幼かった頃のように甘えてくる娘達に、私にもまだまだできることがあると力が湧いてきます。

(母の思い)介護ベッドに横になりお父さんの寝室の方を見ると、布団に横になっているお父さんと目が合い、大丈夫やあ？と声をかけてくれた。お父さんもキツイのに一生懸命に私のお世話をしてくれてとてもありがたいです。夜中に何度もトイレに起きる私にいやな顔もせずだまって手伝ってくれるお父さん。迷惑かけるからもう緩和病棟に入院したほうがいいと思うと私が言うと、よかよ、自分が最期まで世話するけん、大丈夫と言ってくれました。とても感謝しています。寝る前にお父さんの両手を握り、今日も1日ありがとうございませう。また明日もよろしくお願いします。ますと伝えます。今が一番幸せ。私が逝くときはお父さんに手を握って欲しい。

に満たされ、残された家族には生きていく力を与えてくれたと思います。その他、体験ワークショップ、パネル展示など豊富な内容。別会場では、資料やサンプル配布の他、福祉器具の展示説明、パネル展示も行われ、一般の方や医療・福祉関係者など多数の方が訪れていました。



多くの方でにぎわう多目的ホール



リラクゼーション体験の様子



福祉器具の説明を受ける参加者